

『横枕の美しい未来を描くために』

佐賀県立唐津南高等学校

食品流通科3年 奈切 蓮華

春になれば山を覆うほどの菜の花が咲き乱れ、夏は命を奏でるようにセミが鳴き、秋は黄金色の稲穂を感謝とともに収穫し、冬は白い雪が里山を優しく包み込む。これが、私が守りたい美しい日本の原風景である。

私の故郷、佐賀県唐津市相知町の横枕地区は、人口約九十人、平均年齢七十歳の小さな集落。時が経てば消えてしまうかもしれない場所だが、そこには失ってはならない自然環境が広がっている。かつては身近だったサンショウウオが、今も住宅地の小川に生息しているのは、地域が力を合わせて竹林や水田を守っている証であり、人と自然が共存するこの環境を守るため、私は高校一年から「持続可能な里山づくりプロジェクト」に取り組んできた。

近年、生物多様性の喪失が世界中で進行し、私たちの身近な場所でもその影響を感じるようになった。スズメが絶滅危惧種になるかもしれないというニュースを見たとき、私は焦りを覚え、地域の人々と横枕の未来について話し合った。「新しい魅力を作るべきだ」「こんな不便な山奥に誰が来るとね」といった声が上がったが、具体的なアイデアは出ず、高校生の私には何ができるのか分からなくなった。そもそも、横枕の価値とは何なのか――そんな問いが心に浮かんた。

その時、農業を営む木下さんの言葉が私の心を動かした。「この町がこのままあることの意味？それは、失ったら二度と手に入らない環境と、そこで暮らす人たちがじゃないかな。」その言葉に背中を押され、私は農業高校で学んだ知識を活かし、二つのプランを思いついた。

一つ目はニホンミツバチの自然養蜂である。ニホンミツバチは植物の繁殖や生物多様性に欠かせない存在であり、養蜂は想像以上に難しかったが、公民館で悩む私たちに「巣箱に屋根ばつけてみようか」

「家の庭にも置いてよかよ」と地域の方々が助けてくれた。地域と協力しながら、ミツバチは横枕の自然を行き来し、黄金色に輝く百花蜜を生み出した。収穫したハチミツは爽やかな香りと優しい甘さで、まさに横枕の魅力そのものである。私は食品製造の授業を活かしてハチミツを使ったお菓子教室を開催した。E S D（持続可能な開発のための教育）を取り入れた環境食育教室は大盛況で、「いい香り！」「私も蜂見てみたい！」と子どもたちの興味を引き、横枕を訪れるきっかけとなった。

二つ目は、サステイナブルツーリズムによる地域活性である。食品流通の授業で学んだ「既存の価値を見直し、必要な人に提案する」というブランディングの考え方をもとに、地域住民と「横枕農園」を立ち上げた。旬の作物の栽培、環境保全活動、伝統的な祭りなどをSNSで発信し、フランスから訪れた観光客マノンさんは、ナスの植え付けや草刈り体験、地域の方々との交流を通じて「横枕の美しい自然環境が大好きになりました」と語ってくれた。今年度は横枕の水田の六割を管理し、米作りとツーリズムを融合させた新たな挑戦を始めていく。

これまでの活動が認められ、令和六年には環境省の「自然共生サイト」に佐賀県で初めて横枕地区が認定された。地域の努力が形となった瞬間であり、住民みんなで喜びを分かち合った。さらに今年九月には大阪万博で、横枕の環境と私たちの取り組みを世界に発信し、世界に向け守るべき自然環境と失ってはいけない大切な文化について伝える事ができた。私は着実に一步前に踏み出せたのである。

私は高校卒業後、地域デザインを学ぶため大学へ進学し、外からの視点を活かして里山の魅力を再発見・再構築できる人材になりたいと考えている。横枕のような里山が持つ生物多様性は、次世代へとつなぐべき大切な財産であり、この三年間で、地域の協力と外部の理解・支援が不可欠だと実感した。この自然を守るために、私は人生を懸けて多くの人に伝えていく。横枕に咲く美しい花のように、自然と共生する未来を描けると信じている。